

アルラン、萬葉ニハ馬醉木ト書テアセボトヨムト云リ馬此ノ木ノ葉ヲ食テ醉テ死ケル也毒ト云ハ此事ヲ云ニヤ人ニモ定メテ毒ナル歟但シ未ダ其由ヲ不見侍リ萬葉歌云
取繫玉田横野放馬躑躅枝馬醉木花開 此外銀杏梔子ナンドハ和名ニモ不見歟

〔冠辭考阿〕あしびなす さかえしきみか

万葉卷七に詠安志妣成榮之君之略○中安之妣は卷二十に中臣清万呂伊蘇可氣乃美由流伊氣美豆氏流麻埜爾左家流安之婢乃知良麻久乎思母卷十に春山之馬醉花之不惡公爾波思惠也所因友好この外あしびをめで、手折とも袖にこきれんともよめりかくて花の照にはふ色も春ふかく野山にさくなども菌に似たるさまによめるを思へば木瓜にぞ有けるいかにぞなれば其もけは字音にてこの語ならず東人のまどみといひて且馬の毒也とする物ぞ是なるかの伊波都々自を羊躑躅とするに對へて安志妣を馬醉木と書るにてもまざるべしさて馬のこれを喰へば酔て足なへとなるべし其あしひともまどみともいふ語を考ふるに病に志良太美あり貝に志多太美草に毒だみといふ太美は病の事也さてその太美と度美と音の通ふに依に志度美は安志太美の安を略き同音也安志妣は安志太美の太を略ける也妣の濁と美の清後世の歌にとりつなげ玉田よこ野のはなれこまつじまじりにあしみ花さくとよまるもこれ歟又後の俗のあせばといふものをもて古へのあしみを思ふはいと誤也

〔倭訓栞阿中編〕あせみ 新撰六帖に見えたりあせば又あしびとも見ゆ万葉集の馬醉木是也ともいへり今いふえせび也四國にてあせびといひ豫州浮穴郡にあせび谷あり西州にてよしみまばといふとぞえせびに毒ありされど馬の醉ものともきこえず又万葉集によめる形狀にも合がたした此木に生たる茸など必ず人を殺す事は親しく見たる所也大神宮の禰宜荒木田氏は歳首に是を飾る繁茂を祝する也